

レスコフ文献考

——書誌と著作集をめぐる——

岩 浅 武 久

ニコライ・セミョーノヴィチ・レスコフ (1831-1895) に関する文献を繙くたびに見出すのは、19世紀ロシアのこの特異な作家が正
当に評価されていないことに対する、著者達
の嘆きの言葉である。文学史家の Б. В. ヴァ
ールネケは、1921年に書かれた「失われたレ
スコフ」という小文のなかで、レスコフ研究
が進んでいない状況を嘆き、レスコフの手稿
の散逸を心配しているが、そうした嘆きの声
は、現在にいたるまで、ほとんどのレスコフ
研究者の著書のなかに聞きとることができる。
『芸術家レスコフ』の著者 Ю. В. トローイツ
キイは「同世代と後代の人びとに対する影響
が正当に評価されていない作家達がいる。レ
スコフもまたそうした作家である」という言
葉でその著書を書き出しており、同じく現在
の代表的なレスコフ研究者である И. В. スト
リャローヴァも、著書『理想を求めて (レス
コフの創作)』の冒頭に「《きわめて独自のロ
シア作家》レスコフの創作は、今なお十分に
研究されないでいる⁽³⁾」と書き記すことを忘れ
ていない。最近のレスコフ研究の質的量的な
進展にはめざましいものがあるが、それでも、
他のロシア作家のそれと比較するとき、レス
コフ研究はまだまだ立ち遅れていると言わね
ばならない。レスコフ研究が立ち遅れている
原因のひとつは、現在にいたるまでに発表さ
れたレスコフ文献の包括的な紹介がいまだ為
されていない点にも求められるのではあるま

いか。とくにここ20年余りのレスコフ研究
の成果は、ソ連においてもいまだ目録化され
ておらず、それらは個々の研究者の手持ちの
カードにまとめられているのみである。筆者
が試みるのはレスコフ研究の手がかりとして
のレスコフ文献の見取図であり、本稿ではと
くに書誌とレスコフ著作集をその対象とする。

書誌

- (1) П. В. Быков (Сост.). Библиография
сочинений Н. С. Лескова. За тридцать
лет (1860-1889). В кн.: Собрание
сочинений Н. С. Лескова. Т. 10, СПб.,
Типография А. С. Суворина, 1890, стр.
I-XXV. (ブイコフ作成レスコフ著作目
録)

この目録は、若き日からのレスコフの知己
であり、のちに書誌学者になったブイコフが
作成したもので、レスコフの生存中に出版さ
れた唯一のまとまったレスコフ著作集 (いわ
ゆるスヴォーリン版著作集) 第10巻の巻末
に採録された。ブイコフは、じつはこの目録
の前にも、1889年にレスコフ著作目録を出し
ているが、これは1887年までのレスコフの
著作をまとめたもので、著作集に採録された
ブイコフ作成目録は、年代的に見て新しいと
いうだけでなく、内容面でもはるかに充実し

ている。ここには、レスコフの文筆活動開始期（1860年）から1889年までのレスコフの著作の大半が網羅されており、しかも、初出の雑誌・新聞別にまとめられて、著作の表題、掲載頁、署名にいたるまでが明記されている。論文その他で、目録からかなりの著作が抜けおちていること、一部が雑誌目次をもとに作成されたせいとか、目次にあって本文で削除された（検閲のため）ものまで含まれている例があること、頁の記載に時々誤記が見られることなどの欠点はあるが、それでもこの目録は、現在にいたるまでのもっとも完全なレスコフ著作目録であり、レスコフの著作を知るためには欠かせない基本文献である。

ブイコフ作成目録に関してはひとつのエピソードが残されている。1888年にレスコフ著作集の出版構想が持ち上がったとき、レスコフは、自分の著作を新聞雑誌から拾い上げて収録に適当なものを選ぶという作業がきわめて困難だと考えた。そのとき彼の身近にいたアレクサンドロフ、ビビコフ、ヤシンスキイなど若手作家の助言により、ブイコフに相談したところ、ブイコフはすでにレスコフの著作リストを記録しており、無償でレスコフのために著作目録を作成し、それを贈呈してくれたという。⁽⁶⁾レスコフはその友情に感謝し、記念にその目録を少数（100部）印刷し、うち50部が市販された。それが注（5）の目録である。レスコフはまた、これに感謝して自作の『ある農婦の生涯』（Житие одной бабы）を改稿した『樹皮靴のアムール』⁽⁷⁾の手稿をブイコフに贈っている。

- (2) Л. А. Чижиков. Н. С. Лесков М. Стебницкий. +21 февраля 1895. К библиографии его сочинений. —《Известия Одесск. Библиографического общества при Имп. Новороссийском университете》, Т. IV, вып. 1 (Январь

—Февраль 1915 г.) стр. 12–16. (チジコフ「レスコフ著作目録に寄せて」)

チジコフは、ブイコフ作成目録以後のレスコフの著作を集め、さらにマルクス版36巻本レスコフ全集（後述）に収録されなかった作品を指摘することによって、ブイコフ作成目録を補う意図を持っているが、彼は1889年版の不完全なブイコフ作成目録しか見えない様子で、著作集第10巻におさめられたブイコフ目録はチジコフの視野には入っていない。さらに他作家の著作をレスコフの著作と断定するなど、誤った記述が目立ち、目録としての価値は疑問である。

- (3) С. П. Шестериков. К библиографии сочинений Н. С. Лескова.—《Известия отделения русского языка и словесности Российской АН》, Т. 30, 1925, стр. 268–310. (Шестериков「レスコフ著作目録に寄せて」)

チジコフと同様にШестериков（1903–1941）は、ブイコフ作成目録に洩れたレスコフの著作を拾い出すことを、この論文の第一の目的としている。ただし、すでにマルクス版全集におさめられた著作については、ブイコフ作成目録から洩れたものも、その考察対象から除外されている。これは、ブイコフ作成目録と並んで、将来完全なレスコフ著作目録を作成するための貴重な文献だと言わねばならない。Шестериковはこのなかで新たに75点のレスコフの著作名をあげ、そのひとつひとつに解題を付けている。無署名あるいはペンネームで書かれた文章をレスコフの著作と断定する場合は、さまざまな角度からの考察と筆者確定の根拠が詳細に示されており、その説明は十分に納得できるものである。説明で引用された数多くのレスコフ関係文献は、そのほとんどが目録化されておらず、

ロシアにおけるレスコフ像をさぐる手がかりとしても貴重な資料である。ただしシェステリコフ自身もこの論文のなかで認めているように、この論文は、執筆者が地方都市でこれを執筆しなければならなかったという制約を持っており、レスコフ著作目録の作成に必要な文献の一部は調査対象に加えることができず、たとえばレスコフが執筆陣に名を連ねていた『ペテルブルク新聞』(Петербургская газета) はまったく調査されていない。そうした空白を埋める仕事はシェステリコフ以後の研究者に残された課題だが、今のところその課題は、部分的に果たされたものはあっても、全面的にはまだ果たされていない。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

さらにシェステリコフはこの論文のなかで27点にのぼるレスコフの未発表著作を指摘している。これは直接手稿にあたって確認されたものではなく、レスコフの書簡、同時代人の回想等の記述に基づくもので、必ずしも執筆が完了したとの確証はないが、このなかで11巻著作集(後述)に収録されたものは、『悪魔の人形』(Чертовы куклы)、『公正な人。夜半の幻』(Справедливый человек. Полунощное видение)の2点にとどまり、その他のものについてはさらに検討する余地が残されている。

また論文の末尾には、1925年以前に発表されたレスコフの書簡の一覧がある。これは、1925年当時としては最初のレスコフ書簡目録であったが、レスコフの手紙は、ここに紹介されたものを含めて、すでに11巻著作集に数多く掲載されており、現在では資料としての価値は少ない。

- (4) Б. Я. Бухштаб. Н. С. Лесков. Указатель основной литературы. Л., 1948, 83 стр. (プフシュタープ『レスコフ基本文献案内』)

これまでにあらわれたもっとも包括的なレスコフ文献紹介書であり、貴重な文献である。すでに古いレスコフ文献については、メジエ⁽¹⁰⁾ール、ヴェンゲローフ⁽¹¹⁾、ウラジスラヴレフ⁽¹²⁾等の著書で知ることができるが、ことに1920年代後半以後のレスコフ文献を網羅した目録は当時存在しておらず、プフシュタープは、新しいレスコフ文献目録作成の必要性を痛感して、意欲的にこれと取り組んでいる。最初に簡単なレスコフ年譜があり、そのあと「レスコフの著作」、「レスコフに関する文献」、「書誌紹介」と続いている。

「レスコフの著作」の項目では、マルクス発行第3版レスコフ全集(全36巻)と初版、第2版のレスコフ全集(全12巻)の内容が紹介されているほか、さらに15冊の既刊作品集が検討され、その各々について、36巻全集に収録されなかった作品が指摘されている。さらにプフシュタープは、検討済みの全集や作品集に未収録の主要作品リストを作り、そこで42点のレスコフ作品の名前をあげて、その掲載紙・誌を紹介している。(うち11点はブイコフ作成目録に記載されていなかったものであり、また34点は、ソヴェト期になって出た11巻著作集にも収録されていない)。また本書でとくに注目すべきものとして、既発表書簡のリストをあげておかねばならない。ここでは書簡からの一部抜萃を含めて、レスコフの既発表書簡516通の掲載書(雑誌、新聞)とその頁が示されているが、このようにまとまった形でレスコフの既発表書簡に関する資料が呈示された例は本書のほかにはない。⁽¹³⁾1962年に出版されたムラートヴァの目録にもこの類いの資料はあるが、プフシュタープのリストはそれを上回っている。さらに本書には、すでに新聞雑誌等に発表されたレスコフあて書簡70通のリストもおさめられている。

「レスコフに関する文献」の項も充実して

いる。テーマ別のレスコフ文献、回想、伝記資料、レスコフと他のロシア作家との関係等の文献が、古い文献も含めて、ここでは89点あげられており、1945年以前の主要文献の大半は本書で見つけることができる。以上述べたように、本書の利用価値は現在においてもきわめて高い。ただ本書の題名に「基本文献案内」とあるように、ここでは基本的な文献に的がしぼられている。それは利用者に対して親切な方針であるとも言えるが、たとえばレスコフの著作そのものにおける「基本文献」とはいったい何を指すのだろうか。そこでふと考えこまずにはいられない。編者は全集や作品集から抜け落ちたレスコフの著作を指摘するときにその取捨選択をおこなっているわけだが、取捨選択の根拠は明らかにされていない。あらゆる角度から作家の全体像を掘り起こすためには、作家の全著作が研究の対象とならねばならず、研究者に素材への手がかりを与える目録資料においては、あくまでも、たとえばバイコフやシェステリコフが示したような、完璧さを求める姿勢が堅持されねばならないのではあるまいか。ブフシュターブのすぐれたこの仕事を見ていると、なおさらそう思われてくる。

手稿目録

- (1) Н. П. Кашин (Ред.). Н. Н. Островский, Н. С. Лесков.—Рукописи, переписка, документы.—М., 1938, стр. 61-212. (カーシン編『オストロフスキイ、レスコフ—手稿・往復書簡・文書—』)

- (2) Л. П. Клочкова. Рукописи и переписка Н. С. Лескова. Научное описание.—《Ежегодник рукописного отдела Пушкинского дома 1971》Л., 1973, стр. 3-105. (クロチコヴァ「レ

スコフの手稿と往復書簡」)

レスコフの手稿目録は今までに以上の2点が発行されている。(1)はモスクワの文学博物館発行。ここにはレスコフの手稿162点のほか、自筆メモ16点、書簡289通、レスコフあて書簡324通など、さらにレスコフの肖像画や写真、作品の挿絵、伝記資料などの目録も含まれている。これらは元来文学博物館で集められたものだが(コレクションの大半は、作家の息子アンドレイ・レスコフから譲り受けたもの)、現在は中央国立文学芸術古文書館(ЦГАЛИ)に保管されている。(2)は、レニングラードのソ連邦科学アカデミー・ロシア文学研究所(プーシキン会館)手稿部におさめられているコレクションの紹介である。レスコフの作品などの手稿は67点にとどまるが、ここには大量の書簡が集められており、レスコフの書簡の数はじつに1057通、レスコフあて書簡も159通にのぼっている。レスコフの著作、書簡等のすべてをおさめた完全な「全集」が⁽¹⁴⁾いまだ発行されていない現在、2つの手稿目録はきわめて貴重なものと言わねばならない。レスコフの手稿は、目録がすでにあるモスクワの中央国立文学芸術古文書館とレニングラードのロシア文学研究所(プーシキン会館)手稿部のほか、レーニン図書館手稿部に8点、レスコフの故郷オリョールのトゥルゲーネフ博物館に5点あり、さらにレニングラードのサルティコフ=シュチエドリン公共図書館その他にもあるが、手稿の大半は上記の2機関に保管されている。

著作集

- (1) Собрание сочинений Н. С. Лескова. Т. 1-12, СПб., 1889-1896 (レスコフ著作集(全12巻)初版。ペテルブルグ)

まとまったレスコフ著作集としては最初の

もの。第1巻から第10巻までは、1889年から1890年にかけて、レスコフの生存中に全10巻著作集としてA. C. スヴォーリンによって発行されたが、その後、1893年に第11巻が加えられ、さらにレスコフの死後1896年にA. Ф. マルクスによって第12巻が刊行された。著作集に収められた作品は全部で90編。この著作集第10巻の巻末には、前述のブイコフ作成レスコフ著作目録が採録されている。この著作集の第6巻は数奇な運命を辿った。当初出版を予定されていた第6巻には、「零落一族」(Захудалый род), 「僧正生活片々」(Мелочи архиерейской жизни), 「高位への戦い」(Борьба за преобладание), 「天国の竜」(Райский змей), 「宗務院の哲学者」(Синодальный философ), 「聖職の放浪者たち」(Бродяги духовного чина), 「ナリフキ救世主教会の出来事」(Случай у Спаса в Наливках) 「セーニチカの毒」(Сеничкин яд) の8編が収録されていたが、この巻は検閲により1889年9月に発禁処分になったのである。結局第6巻は、すでに第10巻までの刊行が終ったあとの1890年になって、ようやく、「零落一族」1編が残されたほか、最初とは全く異なる内容で出版された。最初の第6巻は、すべて印刷が完了しており、発禁処分のまま、スヴォーリンの印刷所に残されていたが、1893年には改めて発禁処分対象の第6巻を「完全処分」とするとの決定が下され、印刷所に残された全部数が警察の手で押収され、焼却された。現在残っている旧第6巻は、わずかに著者の手に残されたもので、オリョールのトゥルゲーネフ博物館(展示はレスコフ博物館)、レニングラードのサルティコフ＝シチュドリン公共図書館などが所蔵している。

- (2) Полное собрание сочинений Н. С. Лескова. Изд. 2-е, Т. 1-12, СПб., Из-

дание А. Ф. Маркса, 1897 (レスコフ全集・全12巻・マルクス第2版。ペテルブルグ)

このマルクス版全集は、「全集」と名づけられているが、その内容は(1)の全12巻著作集とまったく同じものである。ただしこの「全集」からはブイコフ作成目録はとり除かれている。よく誤解されることだが、この全集に「第2版」とあるのは、マルクスがスヴォーリンの後を受けついで第12巻を発行した最初の著作集を初版と見るのに対して、これを「第2版」と呼んでいるのであって、この「全集」に初版と第2版があるわけではない。

- (3) Полное собрание сочинений Н. С. Лескова. Изд. 3-е, Т. 1-36, СПб., Издание А. Ф. Маркса, 1902-1903. (Приложение к журналу "Нива"). (レスコフ全集・全36巻・マルクス第3版。ペテルブルグ)

革命前に出たレスコフ全集のなかではもっとも充実しており、第1巻の冒頭には、Р. И. Сементковскиイの論文「ニコライ・セミョーノヴィチ・レスコフ——批評と伝記⁽¹⁵⁾——」がある。ただしブイコフ作成目録はここにも収録されていない。この「全集」は全36巻にのぼるものだが、各巻の頁数は200頁位で、収録作品も12巻全集に7編を加えた97編にとどまり、やはり本物の「全集」にはほど遠い。新たに加えられた作品は、初期の戯曲「浪費家」(Расточитель)のほか、「クロイツェル・ソナタにちなんで」(По поводу Крейцеровой сонаты), 「うすのろマラーニヤ」(Малания-голова баранья), 「バヴリン」(Павлин), 「鬼火」(Блуждающие огоньки), 「ブラマダータとラドヴァン」(Брамадата и Радован)。それに発禁

になった第6巻に収められていた「僧正生活片々」が歪められた形で掲載された。この全集が第3版となっているのも、(2)の12巻全集の場合と同じ理由による。これはマルクス発行の3番目のレスコフ全集という意味であり、この36巻全集が版を重ねたというわけではない。またこの全集の場合も、(1)(2)の12巻全集と同じく、注釈はなく、作品テキストのみが収録されている。

- (4) Н. С. Лесков. Собрание сочинений в одиннадцати томах. Государственное издательство художественной литературы, М., 1956-1958. (レスコフ著作集・全11巻・モスクワ・国立文芸出版所)

ソヴェト期になって出版された全11巻著作集で、В. Г. Базанов, Б. Я. Бухштаб, А. И. Груздев, С. А. Рейсер, Б. М. Эйхенбаумの共同編集。各巻に著作の初出および使用テキストの説明を含む注釈が付けられており、難解な語句の注釈もある⁽¹⁶⁾。またこの著作集には、レスコフの論文や回想、書簡が初めて収録されている。収録著作は、文学作品が103編、回想・論文が56点、書簡が422通である。書簡の一通一通に解説が加えられているほか、第11巻の巻末には、シェステリコフの未亡人 К. П. Богатевская の作成したレスコフ年譜がある。これは詳細な年譜で、ブイコフ作成目録が入手困難な現在では、レスコフの著作目録の役割も果たしている。ここにはブイコフ作成目録に無い著作も加えられているが、年譜に記された著作はあくまで主要なものにとどまり、かなりの数の著作については言及がなされていない。革命前のマルクス版36巻全集と比較すると、それぞれ収録作品の選択に異同があり、たとえば36巻全集のうち5巻を占めていた「いがみ合

い」(На ножах), 1冊半を占めていた「見捨てられた人々」(Обойденные) という2つの長編が、11巻著作集からは除外されて⁽¹⁷⁾いる。

上記の著作集のほかに、ある程度まとまった著作集としては、雑誌《Огонек》の付録版として発行された全6巻著作集(Собрание сочинений в 6 томах. М., “Правда”, 1973)と全5巻著作集(Собрание сочинений в 5 томах. М., “Правда”, 1981)がある。前者はプッシュターブ、後者はトロイツキイが編集を担当しており、注釈も付けられている。前者の収録作品は、全11巻著作集の粋をこえるものではなく、注釈も「悪魔の人形」の完結部についての解説のほかは、ほぼ全11巻著作集の注釈に依拠している。後者では、マルクス版全36巻全集に含まれていた「うすのろマラーニヤ」が再録されている。

注

1. Б. В. Варнеке. Растерянный Лесков. В кн.: Посев (Сборник). Одесса, 1921, стр. 83-86.
2. В. Ю. Троицкий. Лесков-художник. М., 1974, стр. 3.
3. И. В. Столярова. В поисках идеала (Творчество Н. С. Лескова). Л., 1978, стр. 3.
4. この目録は非常に貴重なものだが、第2版全集以後、現在にいたるまで採録されていない。
5. П. В. Быков (Сост.). Библиография сочинений Николая Семеновича Лескова с начала его литературной деятельности—1860 г. по 1887 г. (включительно). СПб., Типография А. С. Суворина, 1889.
6. Н. С. Лесков. Товарищеский подарок.

- В кн.: Собрание сочинений в 11-и томах, Т. 11, стр. 238-239.
7. Н. С. Лесков. Амур в лапоточках. Крестьянский роман. Новая неизданная редакция с послесловием П. В. Быкова, Л., 1924.
 8. И. В. Столярова. Н. С. Лесков в «Биржевых ведомостях» и «Вечерней газете» 1869-1871 гг.—«Ученые записки ЛГУ» № 295, Серия филологических наук, вып. 58, 1960, стр. 87-119 など.
 9. しかし, シュステリコフには未発表手稿《Труды и дни Н. С. Лескова》があり, シュステリコフ未亡人 К. П. Богаевская はこれを受けついで, 11 卷著作集のレスコフ年譜を作成している。またシュステリコフ論文を補うものとして, П. П. Кудрявцев の未発表手稿《К библиографии печатных трудов Лескова》があるとのことだが, 未見にて不明。
 10. А. В. Мезьер. Русская словесность с XI по XIX стол., вып. 2, СПб., 1902.
 11. С. А. Венгеров. Источники словаря русских писателей. Т. IV, Пг., 1917.
 12. И. В. Владиславлев. Русские писатели XIX-XX стол., Изд. 4-е, М.-Л., 1924.
 13. К. Д. Муратова (Ред.). История русской литературы XIX века. Библиографический указатель. М.-Л., 1962, стр. 429-434. この目録では, 1959 年までのレスコフ関係文献 127 点が紹介されており, (目録としては不完全なものだが, それでも) 比較的新しい文献を知るためには有効だろう。ことに 1957 年に出版された作家の息子アンドレイ・レスコフの大著に引用されたレスコフ書簡の一覧が掲載頁とともに収められているのは便利である。
 14. ロシア文学研究所の研究員は「ドストエフスキイ全集を刊行したあと, 今度は完全なレスコフ全集を出したいという《夢》(мечта) を持っている」と語っていたが, それがいつ実現するかはまだわからない。また, 掲載作品は未定だが, 1983 年にミニチュア版レスコフ著作集(全 13 巻)の刊行が予定されている。
 15. Р. И. Сементковский. Николай Семёнович Лесков. Критико-биографический очерк.
 16. しかし, 「各巻の注釈担当者によって注のつけかたに一貫性がなく, たとえばセルマンの注釈の場合, オリョール地方方言がよく理解されていない」と指摘する研究者もいる。(См. статью С. И. Коткова “О словарных примечаниях к произведениям Н. С. Лескова”—«Известия АН СССР. Отделение литературы и языка» Т. 17, Вып. 3, 1958)
 17. これら 2 つの版の収録作品の異同に関しては, 下記の書物の巻末に異同リストがある。このリストは, レスコフのフィクション作品を対象を限っているが, 双方に収録されていない作品の指摘もあり, 便利である。
Hugh McLean. Nikolai Leskov: The man and his art. “Harvard University Press”, Cambridge, Massachusetts, London, 1977.